



特集3

「地域に息づく農業経営」 〜将来もこの地域に住み、 地域のための地域づくり〜

はじめに

今治市大西町紺原地区は、都市近郊にあり、農家の大半が兼業農家という地域で、農業機械の共同利用から集落営農が始まりました。

特定農業法人への経緯

最初は、昭和63年に農業機械の共同利用を目的に8人で始めた紺原機械利用組合が出发点です。当時、来島ドックが好景気で、農家の後継者が次々と勤めに出るようになりました。農家では、高齢化が進み労力不足が発生し、一軒ずつが大型機械を所有することが負担になってきたため、共同購入するようになりました。平成12年に紺原機械利用部会を結成し、平成16年11月に、農地の遊休化防止を目的に「有限



組合事務所にて

農業をやめていく人が「農地を買ってくれるか?」と言ってくれるようになりました。農地は年々増え、設立時の水田7ヘクタール

現在は、紺原地区の遊休農地は山手に少しありますが、大半は耕地集約が進んでいます。遊休化のおそれのある農地にはこちらから出向き、地主の方にお願ひして田をすかせてもらうこともありました。会社設立時は、自分たちの農地の小作権を会社に設定する事から始めましたが、設定せずに耕作を続けたところもありました。そのうち地域の年配者が「有(一)こんばらに任せれば田を守ってくれる」と考えて下さるようになり、今では

会社「こんばら」を23人で設立、同年、特定農業法人に認定されました。

農地の遊休化防止対策



仲間との農作業

ルが、今は10ヘクタールを超えるようになりました。

法人化したからこそ、紺原全体がまとまってきたのだと思います。地域の年配者の方々は、若い者が一生懸命やっている姿を見て、苦言も交えつつ「失敗してもかまからやってみたいや」と見守ってくれていたと思います。また、農業機械の導

入助成金や麦・大豆などの転作物への奨励金など、補助を受けていますが、そのおかげでどうにか進んでこれたと思います。当時、大西町や農業委員会の理解を得て、今治市に合併する前に事務所兼倉庫も大西町の補助を受け建てる事が出来ました。

問題点及び今後の課題

人材、収益、農地、この3つの確保が課題です。人材については高齢化が進む中、今の現状はいつまでも続かない事はわかって



有限会社こんばら
代表取締役
菅 恵志



地域農業を担う集落営農

～地域と共に生きる農業生産法人～

特集

収益の高い有機栽培の米づくりにこだわっています。自然乾燥に近い形で調整できる常温除湿乾燥機の導入で仕上がりが良くなりました。良質の米を選別する色形選別機も導入し、福祉施設や飲食店などへ販売しています。ほかに畜産農家との耕畜連携も品質向上や収入アップにつながっています。6～8ヘクタール分の稲藁を束にして畜産農家へ搬送し畜産農家が

課題への取り組み

います。上手にバトンタッチできるような後継者を育てていかななくてはなりません。また、農業は天候によつて収益も左右されますが、通年で安定した収益を確保できるような考えたいものです。地域の中で農業を続けていくために、生活ができる体制を整えなければなりません。ゆくゆくは、2、3軒の家族が農業に専念して「食べられる農業」を目指して経営体制を整えたいです。でなければ、後継者も出ません。



籾だね播種作業

農地は、住宅の間を縫うように分布しているので周辺住民への配慮も必要になります。農薬の散布時には洗濯物を入れても

地域住民との交流と環境保全

計画においては、「加工所」の建設も計画しています。これらを通じて、地域の活性化としての「地域興し」に繋がりたいと思っています。そして、これらの取組みは、当社の事業発展の一役となりうると考えており、中長期計画においては、「加工所」の建設も計画しています。

ら堆肥をもらい田畑に鋤込み、米や麦を作ります。以前は堆肥を購入していた分コストダウンになりました。畜産農家にも好評で、国産の稲藁だと牛の食が進みよい肉付きになるそうです。

また、(有)こんばらで生産した農産物を使用して、「地産地消」を目指した手作りによる加工品(味噌・菓子・餅・漬物ほか)の開発や製造から販売の一貫性システムの構築、これらを担当女性部の組織強化を通じて、地域の活性化としての「地域興し」に繋がりたいと思っています。そして、これらの取組みは、当社の事業発展の一役となりうると考えており、中長期計画においては、「加工所」の建設も計画しています。



チャリティー

らったり、窓を開けないよう注意を促したりしています。収穫したもち米で餅つき大会をするなど地域と交流しながら共存できる形を探っています。また、将来の担い手確保につながればと、田畑を開放して子供たちが芋掘りや田植えなどを体験できる機会を設けています。田植え時に人手が必要な時は若い人の手助けも借ります。その中から1人でも担い手として加わってくれば。我々との作業中のコミュニケーションを通じて農業に興味を持ってくれることに期待したいです。

おわりに

他にも、環境保全の思いで紺原の山林に群がる竹を伐採し、何とか活用できないかと、竹炭、竹酢、竹チップ堆肥等を作り出して有効活用しようとしています。ご飯や冷蔵庫に入れたり、利益はわずかですが環境保全になるかと思いい取り組んでいます。

私たちは、集落営農の形こそでできましたが、今後は、集落ぐるみの安定した農業経営をするにはどうすればいいのか、将来のために模索し続けていかなければならないと思っています。